

んだ。駅近くの竹田宮邸にて昼食をいただき、師団長、赤柴八重蔵中将閣下のお迎えをいただき無事に麻布の兵舎に落ち着いた。即日天皇陛下の御名代の賀陽若大尉の宮様のもとで真新しい軍旗の拝式兼入隊式が厳粛にとり行われました。

「近衛歩兵第七連隊のため軍旗一流を授く、汝等軍人協力同心一致して、益々威武を宣揚し、以って帝國を保護せよ」誠に名誉この上なく、ますます尽忠報国の念は燃え上がる。以後において何回も竹の園生に参内したり、各宮邸の御守護の大任、水呑み百姓に生まれながら、軍服を着用しただけでこの幸せ感、終生の宝と思いつづけている次第です。

翌二十年春四月、再渡満して開拓地に到着、翌日、即日山形連隊に応召の身となり、終戦は山形も有名な血染の桜の台のもとで詔勅拝読でした。

我が軍隊生活の回顧録

岐阜県 村橋 義雄

初年兵時代

昭和十八年九月末、地方の高等商業を卒業し、当時大阪に本社をおいていた某商社に就職し、前途に洋々たる希望をもっていた折も折、突然、学徒出陣の命が出された。昭和十八年十二月一日、兵庫県加古川北方の戦車十九連隊（中部四十九部隊）に学徒兵の一員として入隊した。小生にとって幸運だったことは全員が学徒兵であったため、初年兵教育はかなり手心を加えて行われた。しかし小生のごとく商科系の者にとって数学を中心とした戦車教育過程は誠に苦手で、小生の知能を最大限生かせる経理部幹部候補生に目標を定め、日夜寸暇を惜しんで勉学に励んだ。

最初は今回の入学学徒全員（但し幹候無資格者を除く）がまず経理部の試験を受けるよう指示があり、総勢約九

○〇人に達した。お蔭をもって、一九年二月競争率約三〇倍の難関を突破して経理部幹候に合格した。その時の天にも上る嬉しさは、今でも忘れることができない。

直ちに約三〇人の合格者が大阪における中部軍直轄部隊経理部集合教育のため青野ヶ原を出発した。

大阪では他の中部軍直轄部隊から選抜された学徒兵を入れて、計約一〇〇人余りが在大阪の部隊となり、その場所に寄宿、午前中は大阪城内にある中部軍司令部において陸軍経理の基本をみっちり教育された。午後は訓練（主として歩兵訓練）を徹底的に受けた。特に長柄橋周辺における戦闘訓練は思い出が深い。

大阪における集合教育の目的は約一〇〇人の候補生を甲、乙両種に区分することであったので、お互いがライバルであった。約三分の二程度が甲種となり経理学校入校の資格を得ることになる。教官側からしてもエリート集団の中からさらに甲乙に振り分けることは誠に至難のことであったと思う。そのためほとんど毎日が学科試験で厳しい日が続いた。

おかげをもって四月の発表で小生待望の甲種幹候に合

格、直ちに伍長に進級した。思うに官立とはいえ地方の高商卒の小生が、一流有名大学の俊才に交じって、よくぞ経理部甲種幹候の金的を射止め得たことと今でも不思議に思わざるを得ない。

新京陸軍経理学校時代

昭和十九年五月末、我々は大阪、下関、釜山を経て貨車で一路新京へ向かった。京城、平壤、新義州を経由、憧れの新京に到着した。

当時は機密保持のため各部隊には一連の番号が付けてあり、陸軍経理学校は満州第八一五部隊と呼ばれていた。小生たちは内地から派遣されていたので第二中隊配属となった。第一中隊は在満州部隊から選抜された候補生で構成され、各中隊とも第一区隊から第五区隊まであり、各区隊とも約一〇〇人、両中隊あわせて約一〇〇〇人の大世帯であった。

この一〇〇〇人の候補生が十一月末まで約六か月間、起居をともしするわけで、いわゆる「同じ釜の飯を食った」仲間ということになる。十九年六月入校、十一月末卒業の我々集団が第八期生と呼ばれていた。

当時の学校長は原田主計大佐であった。

小生は第二中隊第四区隊に編入され、区隊長は湯川大尉であった。初年兵時代とは違い各区隊には軍曹の助教一人のみで、内務班の運営はすべて候補生に一任されていたが、訓練は極めて厳しく、午前中は経理学科の講義、午後は歩兵訓練で全く息を抜く暇もない生活であった。なお軍隊では序列が重要で一個中隊約五〇〇人の生徒を一番から五〇〇番まで短期間に決定せねばならないため、ほとんど毎日が試験、試験の連続であった。

また夕食後は就寝まで約二時間の自習が課せられていたが、昼間の訓練の疲れから居眠りをする生徒が多かった。その際、間髪を入れず区隊長の竹刀による洗礼を受けたが、今にして思えばよくぞかかる訓練に耐え得たものと我ながら感心している。やはり当時の若さと、バイタリティが猛訓練に耐え得たものと思う。

経理学校時代の思い出はいろいろとあるが、特に印象に残っているのは、午後の学校郊外における軍事訓練が終わり、広漠たる大平原の赤い夕陽を眺めながら軍歌（「戦友」の一節に歌われたとおり）、部隊歌を歌い帰

宮したことである。その隊歌の一部を紹介すると、

白雲悠々天高く

落日赫く地は廣し

興亜の礎石揺ぎなき

此処王城に選ばれて

集える健児勅諭仰ぎつつ（以下略）

入校当時の伍長が在校半ばで軍曹に昇進した。かくして無我夢中で頑張った六か月の教育が終わり、いよいよ卒業が近づいた。卒業式当日は関東軍司令官山田乙三大将閣下を始め関東軍高官の臨席を仰ぎ盛大に催された。式参列に先立ち我々候補生はお互いに軍曹の襟章を取りはずし合い、あらかじめその下につけてあった曹長の階級で式に臨んだ。ようやく待望の見習士官になったという感激を抑えることはできなかった。

式終了後、直ちに各中隊別で我々候補生の配属先の発表があった。小生の赴任先は新京よりやや南の四平街にある教導戦車旅団整備隊付主計であった。

卒業生の大半が零下数十度といわれる北滿の辺境の地に配属されたことを思えば小生は幸運だったと思う。

主計見習士官時代

昭和十九年十二月早々、汽車で任地に向かった。

夕方到着、部隊長に申告、その他の将校たちに紹介された。到着後数日を経て判明したことは、当部隊はそれほど大部隊でなく、すでに老練の主計准尉が着任していたので、さらに新しく小生を必要としない雰囲気であった。したがって、これという仕事もなく、どちらかといえば体の置き場がなかった。

三か月後、突如新部隊編成に伴う主計将校として転出の命を受けた。軍歌で有名な遼陽で編成される独立鉄道十三大隊付を命ぜられ、直ちに出發せよとのことだった（確かな情報では、今、部隊は中国方面への出勤を要請されていた）。

当時では平穩そのものの満州、強い愛着がこみ上げてきた。今にして思えば、この命令は小生のその後の運命を大きく幸運に導いてくれた結果となった。なぜならば、在満部隊に配属された数多くの同期生が、約六か月後、予期せざるソ連軍進攻に關東軍は全面敗北し、ほとんどシベリヤの抑留生活を送る破目となった。

人間の運、不運は全く紙一重の差で決まるという現実
に直面し、ただ小生の強運を支えて下さった神仏に今でも感謝しているものです。

転出先遼陽の新部隊の一員となり、大隊長は樋口大尉の独立大隊なので、一般の大隊より規模は大きく、隊員は約一〇〇〇人。当初我が隊は天津經由洛陽に向かえることであつたが、すでに目的地周辺の戦況は厳しく、最終的には別命あるまで天津に駐屯せよと命令の変更があつた。

小生は経理部下士官、兵隊数人を引率、先発隊として天津の設営準備のため国境の街、山海関經由で天津に入った。戦地における主計将校の最重要任務は、食糧及び宿舎の確保で、これからが小生の腕の見せどころと、その實務の重大さに身の引き締まる思いがした。早速、当たって砕けろの特攻精神で野戦貨物廠の係官と交渉した。

幸い当分の間、同廠で責任をもって引き受けるとの確約を得たので安堵した。当部隊の主たる任務は天津を中心とした約数十⁺周辺に及ぶ鉄道輸送の確保と安全の保

障で、機関車の運転手は全部当部隊から派遣していた。各中隊（全部で四個中隊）は天津を離れて地方都市に分散駐屯、大隊本部だけが天津に長期駐屯した。

広漠たる酷寒の満州に比べれば、天津は正に天国であった。甘味品を始めあらゆる物資が天津の街角にところ狭くと並んでいた。悲しいかな当時の我々軍人の給料ではいかんともなし得なかったが、当時ぜいたくの限りを尽くしていた在留邦人、とくに同県人を通じて度々差し入れの恩恵に浴することができ、今でも感謝している。天津駐留中の任務は先にも列挙しましたが、今思い出の一つに月一度給料袋受領のため、北京を訪れることであつた。すなわち携帯用軍用金庫をトラックに積み込み、經理部下士官、兵隊若干名とともに、まず野戦鉄道司令部を訪れ、小切手を受け取り、指示された銀行で現金に替え、大隊全員の給料支払に当てることであつた。

トラックでかの有名な蘆溝橋を渡り、一文字山の忠霊塔を眺めながらの大都会北京へ通ずる田園風景は、小生にとって終生忘れ得ない光景でありました。

かくして天津駐屯の数カ月後、晴れて陸軍主計少尉に

任官した。時に昭和二十年七月のことであつた。ところがその約一か月後に悪夢のごとき事態が勃発しようとは全く予測し得なかつた。八月十四日に司令部から連絡があり、明十五日は天皇陛下の重大な玉音放送があるから待機せよとのことであつた。

翌十五日正午、ラヂオのスイッチを入れたところ、我々の耳に突如昭和天皇の終戦宣言の玉音が伝わった。我々北支駐留軍人、軍属さらに在留邦人にとって、これは正に寝耳に水といった驚きであつた。なぜなら、天津市内は至って平穩無事、空襲一つなく、ちょうど我々は内地から当地に疎開したような状況であつたからだ。

なんで無条件降伏したのか？我々だけでもあくまで戦うのだ等々の議論が交わされたが、結局、陛下の命令に従うこととなつた。

在留邦人にとって、今回の敗戦による内地帰還は、正に後ろ髪を引かれる思いだつたろう。彼らの多くは日本内地を捨て、十年以上もの間、寢食を忘れて努力した結果得た今日の地位、財産を一瞬のうちに失つた悲しみは、彼ら本人でなければ真の意味で理解することはできない

と思う。

天津市内の思い出としては、街路に植えられたアカシヤの木と、市内を縦断して、やがて東支那海に注ぐ白河である。これらの情景が一瞬のうちに我々の眼前から消え去ろうとしていた。

終戦から内地引揚げまで

とにかく戦いは終わったのだ。我々一三大隊は合流のうえ天津を引き払い、郊外の部落に集団移動した。

二十年の正月は長辛店ですごした。正月の浮かれ気分が警備を疎かにした報いで、一月四日ごろと思うが突如八路军に襲撃された。たまたま我々の部隊の営内に宿泊していた一部在留邦人と、当方兵士に若干の犠牲者を出したことは誠に残念であった。我々は昼間の警備の余暇を利用して軟式野球、バレーボール等に興じながら、ひたすら復員を待ち続けた。

二十一年四月の初め、我々は一同天津貨物廠に集結を命ぜられた。いよいよ待ちに待った祖国日本への帰還が近づいたのだ。一部将校、下士官、兵の中には、懐かしい故郷を離れて以来実に数年の月日が経過した者も数多

く、小生とて満二カ年になろうとしている。

天津貨物廠に集結し、在留邦人たちと共同炊事をした約一か月後の二十一年五月早々、ようやく待望の復員日が決定、直ちに天津郊外の塘沽港より一般邦人も交えて計一千数百人が乗船、一路、祖国日本に向かった。

しかしながら、戦後海外からの復員で有名な米国籍のLSTに乗船した我々には一抹の不安があった。日本へ送還するとは口先ばかりで、実際は南方のどこかの国へ捕虜として連れさられるのではないか？といった危惧の念を抱いたまま、船中で一夜を明かし翌朝を迎えた。そのうち島々が点々と眼前に展開され、しかも松の木が沢山生えているではないか、松の木は中国でも皆無とはいえないが非常に珍しく、全員がここはすでに日本ではないかと思いはじめた。しばらくすると小舟が一艘我々の船に近寄り、魚と我々の私物品との物々交換を申し込んできた。

彼がいうには、船は五島列島を通過中で、あとしばらくで日本の港に入ること。ようやく海面の霧も晴れ渡り、懐かしの日本に間違いなく到着する確信を得た。

全員が甲板上に集合、将校、兵の区分も忘れ万歳、万歳の歓喜が船全体を包んだ。

昭和十九年五月、日本をあとにした時点で、再び祖国に足を踏み入れることは全く不可能と諦めていた小生にとって、その時の感激は六十有余年の我が生涯において最高かつ永久に忘れ難いことで、人間の生命は何物にも替え難く尊いものであると、つくづく知らされた次第である。「君の人生でもっとも嬉しかったことは」と質問があれば、即座に答えるであろう。「生きて再び祖国の土を踏んだこと」と。

我々を満載したLSTは、やがて朝の連続テレビドラマ「和っ子の金メダル」で一躍有名になった日本海側の山口県仙崎港（当時は小さい漁港）に入港した。

お互いに再会を約束して、それぞれの郷里へ足取りも軽く降り立った。時に昭和二十一年五月早々、快晴の日であった。

今次大戦において不幸にも戦病死された将兵の皆様のご冥福を衷心よりお祈り申し上げ、我が軍隊生活の手記を終ります。

終戦後の満州の労苦

熊本県 村上逸夫

私は昭和十九年一月に佐世保海兵団主計科に入団しました。海軍部隊の主計科は庶務、経理を掌る主計科事務室と、衣糧を掌る被服倉庫と烹炊所に分かれています。新兵はすべて烹炊作業です。

入団して間もなく新兵教育のため、鹿児島県の出水海軍航空隊主計科に転属しました。

何百人もいる中に外地、内地の部隊と適当に振り分けられ、幸いにも郷里に近い部隊で、ほっと胸を撫でおろしたのが実感でした。

新兵教育の班長は、巻木上主曹、助手は厳しい野見山兵長でした。烹炊所の主計兵は烹炊が主体、つまり飯炊きのことですが、付随して食糧運搬も入るわけです。

したがって、新兵教育の中に重量運搬に耐える体力作りが組み込まれ、日課として米俵かつぎの訓練がなされ